



金城 聡子

材としたカラーシユが共演する。天然塗料の漆は扱いが難しく工程も複雑だが、前田は伝統的手法にこだわらる。漆とその制作過程に魅了され、仕上げには研ぎ跡

地や中塗りを重ね、塗っての復興や復元、倒れたままは研ぐ作業を繰り返す。突ら権力のスピーディーな対応と展開が乱暴な行為にも映り、再生に必要な時間や取り残された本質的なものは、誰でも座れるパイプ椅子の「玉座」を置いた。彬のカラーシユにも登場する蠟色塗の螺鈿十字架と絶望の距離で捉えると、火災後

SSの文字をデザイン化し、シニカルなプレートを配置する。十字架の製作は信仰を持たなくとも崇高なものに触れる感覚があるという。漆黒に浮かぶ螺鈿の十字架は、室町時代に日本から海外へ輸出された南蛮漆器を想起させ美しい。前田貝揃案は初日に琉球美・研究会(永津慎三会長)と共同で宮城県のアーティ

## 「漆工房 前田貝揃案」創設展 新たな表現を提案

那覇市金城のギャラリーアトスで「漆工房 前田貝揃案」創設展が開催中である。工房は前田比呂也を代表に子の彬と佳那が「沖縄の伝統工芸である琉球漆器の国際的な研究と出品・展示交流を通して、新たな表現を提案していく漆プランド」と設立趣旨を掲げた。今回のテーマは「玉座」。一家は沖縄の漆芸界を牽引して首里城復元にも深く関わった前田孝允の子孫で、前田比呂也と彬は父親から技術を体得し、後に前田は油画を彬はカラーシユ写真やウェブ上へと表現活動を広げた。前田は昨年、廃虚の旧前田漆芸アトリエを解体し、新たな工房を立ち上げ、この節目に首里城と向き合ったのである。

を残すなど痕跡をみせる。今回は新たに、赤黒以外の青・緑・桃色の色漆による壁面オブジェ「酸化皮膜」を発表した。正方形の小盤にサンゴで突起をつけ、下



「漆工房 前田貝揃案」創設展に並ぶ作品。中央は前田比呂也の「酸化皮膜」、両端は前田彬のカラーシユ「CHAIR OF PAIN」(左)、「404 error」(右)＝那覇市金城のギャラリーアトス(写真提供・前田彬)

「漆工房 前田貝揃案」創設展は那覇市金城のギャラリーアトスで4月3日まで開催。入場無料。午前11時～午後6時(最終日は5時)。問い合わせは☎098(859)0158、ギャラリーアトス。

(浦添市美術館学芸員)

「漆工房 前田貝揃案」創設展は那覇市金城のギャラリーアトスで4月3日まで開催。入場無料。午前11時～午後6時(最終日は5時)。問い合わせは☎098(859)0158、ギャラリーアトス。